能島村上水軍の歴史

□　海賊たちの跳梁

９世紀頃から西日本の各地で海賊たちが跳梁するようになった。厳しい収奪を逃れた浮浪農民や、土地などの生産手段を保証されない海民たちは、国家の手の届かぬ瀬戸内の海辺や島々に住みついた。彼らはひと度飢餓に及べば、直ちに食料を求めて目の前を航行する船を襲った。中央政府は度々地方に海賊の追討を命じたのだが、成果は一向に上がらなかった。彼らの多くは小船を住処とする移動性の強い海上生活者で、政府にとっては捉えがたい存在だったからである。組織する者が現れた時は、彼らはたちまち強大な勢力となって国家の存立を脅かした。このため、中央の支配者は常に海上勢力の掌握に心を砕いたのであった。

□　三島村上氏

瀬戸内では、漁民たちの長は「ムレギミ」と呼ばれたが、のちこれが転じて「村上」になったという。鎌倉時代の終わり頃から、村上氏たちは瀬戸内各地で台頭してきた。南北朝動乱期、彼らは南朝に属して戦い、次第に海の武士団（海賊）として市民権を得るのである。彼らの統領としては村上義弘が著名であるが、その存在は未だ伝説の域を出ていない。義弘の戦死後、その遺産を受け継ぎ、村上一族を再び組織したのは、南朝の重臣北畠氏であるという。

芸予の村上氏はいずれも北畠師清をその始祖とし、師清の孫雅房・吉豊・吉房の三人が各々、芸予諸島の島々に定着し、能島・因島・来島の村上三家を立て、「三島村上氏」を称したという。しかしながら、確かな史料に三島村上氏の名が見られるようになるのは、１６世紀半ば以降のことである。

□　能島村上水軍

三島村上氏の中で最も早く歴史に姿を現すのは、能島村上氏であった。1349 年（貞和５）、初め「野島」の名が見られ、1405 年（応永 12）には「能島衆」が登場する。室町初期の能島衆は、一方で海上警固により東寺から報酬（酒肴料）を得ると共に、一方では東寺領荘園弓削島を侵略するといった、未だ瀬戸内海衆の一集団にすぎなかった。しかしこののち、周辺海賊衆との結束を固め、芸予から防予海域に勢力を拡大し、中部瀬戸内海の主要な航路・拠点を掌握する大海賊衆へと成長したのである。室町幕府・守護体制の確立に伴い、村上氏は一応、河野氏を主家と仰いではいるが、河野氏からの知行宛行はほとんど見られない。この頃は、その財政は多く水先案内・海上警固・海上運輸といった独自な海上活動に伴う収入に依っていたようである。

□　海賊大将軍　村上武吉

能島水軍が全盛を謳歌するのは、戦国時代、村上武吉が当主の時である。武吉は天文初年、宗家の吉益と戦って家督を奪い取り、能島水軍の頭領となった（能島騒動）。そして現在の宮窪に本拠を構えて能島と号し、中・西部瀬戸内海に監視・連絡網を設け、要所要所に城砦を構え、堺から坊津までといわれた海上王国を実現した。能島水軍は、水軍レースに見るような、小舟を多く駆使する機動戦、火薬の活用（焙烙玉）など、海上戦闘の達人であった。能島衆は、弘治の厳島合戦参戦・勝利後、永禄の尼子・大友合戦、天正の木津川合戦と、毛利氏の中国・九州平定に協力し、瀬戸内全域に勢力を延ばした。そして自らの海上権益を守るため、瀬戸内交通の実力支配を背景として、毛利・大友・島津氏ら近隣の大大名と相互に海上権益を保障しあう盟約を結んだ。武吉は、上関・厳島・塩飽などの札浦で、瀬戸内を航行する船舶から帆別銭・駄別銭などの関税を徴収し、それらに丸に上の字の過所旗を与え、その無害通行を保証した。今日我々は、戦国期村上氏の海上支配の実際を、武吉を制定者とする多くの瀬戸内の廻船大法に見ることができよう。

□　海賊禁止令

1587 年（天正 15）、豊臣秀吉は、海上に私的な関所を設け、通行税を取り立てる行為を海賊行為として禁止した。この年、村上元吉は部下の斎灘での海賊行為を厳しく責任追及され、小早川隆景の筑前移封に伴い、筑前に移住し、能島水軍の歴史は終わった。こののち村上氏は毛利氏の御船手（水軍）に転化していったのであった。

村上水軍関係略年表

室町時代	1333年（元弘3・正慶2）	護良親王、備後国因島本主治部法橋幸賀の戦功を賞する。
	1349年（貞和5・正平4）	野島（能島）の海賊、東寺に雇われた幕府の使節が弓削島荘に入るのを警固する。
	1392年（元中9・明徳3）	南北朝統一
	1403年（応永10）	足利義満「関方」の通定に遣明船の警固を命じる。
	1420年（応永27）	朝鮮回礼使宗希璟ら、海賊の難を避けるため東賊一人を雇う。
	1427年（応永34）	因島の村上備中入道、赤松氏討伐の出兵に対し足利義持から感状を受ける。
	1434年（永享6）	細川氏、野島（能島）関立等の討伐を塩飽衆に命じる。
		伊予・周防の海賊衆、遣明船を警固する。
	1449年（宝徳元）	河野教通、村上吉資の佐礼城における戦功を賞する。
	1462年（寛正3）	能島村上氏、小早川氏一族小泉氏らとともに弓削島を押領する。
	1467年（応仁元）	この頃、河野氏家譜「予章記」が編纂され、その中に、南北朝時代に村上義弘が河野氏を助けた記事なども記される。
戦国時代	1499年（明応8）	このころ、今治的場の海賊、厳島神社から太刀・鎧を盗むが、河野氏が取り戻す。
	1524年（大永4）	村上吉智ら、大浜八幡宮の社殿を造営する。
	1541年（天文10）	能島村上氏、尼子氏に応じ厳島を攻め大内義隆と戦う。
		大内氏配下の水軍、芸予諸島を攻撃し、来島の村上通康らが撃退する。
	1542年（天文11）	来島の村上通康、河野通直から後継に推され、河野氏家臣団と抗争する。
	1555年（弘治元）	陶氏と毛利氏、厳島で合戦し、能島・来島村上氏毛利方に加勢か。
	1558年（永禄元）	このころ、能島・来島村上氏、三好方に属し、讃岐天霧城で合戦する。
	1561年（永禄4）	毛利氏と大友氏、豊前国簑島で合戦。三島村上氏も参戦する。
	1567年（永禄10）	来島の村上通康没する。通総（牛松）、家督を継承する。
	1568年（永禄11）	宇和・喜多郡境で鳥坂合戦が行われ、能島・来島村上氏も参戦する。
	1570年（元亀元）	村上武吉、毛利氏と盟約を結ぶ。
	1571年（元亀2）	村上武吉、大友氏に味方し、毛利氏・来島村上氏ら能島城を包囲攻撃する。
	1572年（元亀3）	大友宗麟、来島の村上通総と能島の村上武吉の和解を斡旋する。
	1573年（天正元）	室町幕府滅ぶ。
安土・桃山時代	1575年（天正3）	来島の村上通総、別宮大山祇神社社殿を修築する。
	1576年（天正4）	能島・来島村上氏、毛利勢に加わり、本願寺を助けて摂津木津川口で織田軍を破る。
	1577年（天正5）	村上元吉、小早川隆景をたすけて讃岐元吉に出陣し、長宗我部氏の兵を破る。
		能島村上氏、ルイス・フロイスの船を警固する。
	1578年（天正6）	再び木津川口での戦い。毛利勢は九鬼水軍を擁する織田軍に敗北。
	1581年（天正9）	村上武吉、厳島社の祝師に過所旗を与える。
	1582年（天正10）	織田方の勧誘激化。来島の村上通総は織田方に属し、能島の村上武吉・元吉は、織田方の誘いを断り河野・毛利方に属す。
	1583年（天正11）	来島の村上通総と毛利氏との間で、鹿島沖合戦が起こる。
	1585年（天正13）	豊臣秀吉、四国を平定し、伊予国を小早川隆景に与える。
		能島の村上武吉と元吉、務司・中途城を退去し、小早川隆景から屋代島他を与えられる。
		来島の村上通総と得居通幸、風早郡・野間郡の所領を与えられた大名に取り立てられる。
	1586年（天正14）	堺から豊後に向かう宣教師が、能島村上氏から通行の安全を保証される。
	1588年（天正16）	秀吉、海賊禁止令を発布する。
	1592年（天正20）	文禄の役が起こり、村上諸氏も参戦する。
	1597年（慶長2）	慶長の役が起こり、村上諸氏も参戦する。村上通総、戦死する。
	1600年（慶長5）	関ヶ原の戦いがおこる。毛利勢、伊予国の加藤嘉明領に侵攻し、村上元吉、戦死。
		戦後、毛利氏は防長二国に移封され、能島村上氏・因島村上氏も領地を移される。
	1601年（慶長6）	来島康親、豊後国森に移封される。
江戸時代	1603年（慶長8）	江戸幕府開く。
	1604年（慶長9）	村上武吉没する。
	1610年（慶長15）	村上景親没する。
	1611年（慶長16）	能島村上氏・因島村上氏、毛利氏の御船手組となる。

※時代の区分には諸説あります。